

正ちゃんとおかいこ

小川未明

青空文庫

東京とうきょうの町まちの中なかでは、かいこをかう家うちはめつたにありませんので、正ちゃんしょうちゃんには、かいこがめずらしかつたのです。

「かわいいね。ぼくにもおくれよ。」といって、学校がっこうへお友ともだちが持もつてきたのを三匹びきもらいました。

そして、だいじにして、紙かみに包つつんで、お家うちへ持もつてかえると、みんなに見みせました。

「あたし、こわいよ。」と、妹いもうとのみつ子こがにげしました。

「私わたしも、はだか虫むしはきらいです。どうしてこんなものをもらってきたの？」と、お母かあさんがおつしやいました。

正ちゃんしょうちゃんのほかにほだれも、あまりかいこをかわいらしいというものはありませんでした。

「兄にいさん、どつかへ持もつていつてよ。」と、妹いもうとがたのみました。

「こんなにおとなしいのに、かわいそうじゃないか。」

「正ちゃんしょうちゃん、おとなしいのではないのよ。しっかり紙かみに包つつんできたから、よわったんでしよう。」と、お姉ねえさんがいいました。

「おまえ、くわの葉はがなくてどうするつもり？」と、お母かあさんがおつしやいました。

くわの葉はは、正ちゃんしょうちゃんが、もうちゃんと野村のむらくんからもらうやくそくがしてありました。野村のむらくんの家うちはすこしとおかつたけれど、かきねに二本ほんのくわの木きがあつて、それをいくら取とつてもいいというのでした。

「くわの葉はは、もらうやくそくがしてあるんだよ。」

「まあ、手てまわしがいいのね。」

「だからお母かあさん、かつてもいいでしょう。」と、正ちゃんしょうちゃんは賛成さんせいしてくれるものがないので、心こころぼそくなりました。

「みつ子こがこわがるから、はこに入れて、物置もの置きの内うちにでもおおきなさい。」

正ちゃんしょうちゃんは、おかしの空あきばこをもらつて、くわの葉はをきぎんで入れて、石炭せきたんばこの上うへにのせておきました。

晩方ばんがた、正ちゃんしょうちゃんが外そとからあそんでかえつてきけると、いつしかくわの葉ははしおれてしまつて、二匹ひきは死しんで、あとの一匹ひきだけが、はこのすみにじつとしていました。

「どうして死しんだのだろうな。」

正ちゃんしょうちゃんは赤あかいじてん車しゃにのつて、死しんだかいこを川かわにながしにいきました。そのかえ

りに、あたらしいくわの葉はをもらってきました。

あくる日ひのことでした。学校がっこうで先生せんせいが正ちゃんに、

「きのうのかいこをどうしたか？」と、おききになりました。

正ちゃんしょうちゃんは、二匹死ひきしんでしまつて、いま一匹ひきしか生きていないことを話はなしました。すると、やさしい先生せんせいは、

「二匹ひきではさびしいな。学校がっこうでかっているのをかえりに一匹ひきあげるから、もつておいで

。」と、いつてくれました。

正ちゃんしょうちゃんは時間じかんがおわると、先生せんせいのところへまいりました。

「さあ、こうして持つていくといい。」

そういつて、先生せんせいは大きなくわの葉はの上に一匹ひきのかいこをのせてくれました。そのかいこは、正ちゃんしょうちゃんの家うちにいるのよりかずつと元気げんきでした。

正ちゃんしょうちゃんは葉はの上にのせてもらったのをおとさないように、両手りょうてでささえながら、学校がっこうからお家うちへかえつてきますと、みちをとおる人々ひとびとは、なんだろうと、正ちゃんしょうちゃんの手ての中なかをのぞきました。

「あの子こは、かいこをたつた一匹ひき持つていくよ。」と、わらつた子こどももあります。

かいこをかつてから、正ちゃんは、毎朝お母さんにおこされなくてもひとりでおきて、じてん車しやにのつて、野村のむらくんのところまでくわの葉はをもらいにいきました。

「あ、また死んだ。」と、正ちゃんは、物置もの置きでさけびました。

「お母さんかあ、あんなくらいとところにおくから死んだのですよ。」

「じゃ、お座敷ざしきへ持つてきておおきなさい。」と、お母さんかあはおつしやいました。

「ほんとうにお座敷ざしきでいいの？　しかし、だめだなあ、一匹びきになつてしまったもの。」と、正ちゃんしょうちゃんは力ちからをおとしました。

正ちゃんしょうちゃんが心こころからかいこをかわいがつてゐることがわかつたので、お姉さんねえもいじらしくなつて、

「私わたし、蚕糸試験所さんししけんじよへいつておねがいして、一匹びきもらつてきてあげるわ。あそこは、かいこや生糸きいとのことをしらべているお役所やくしよだから、かいこがかつてあると思うわ。正ちゃんもいつしよにいらつしやいね。」と、いいました。

二人ふたりは電車でんしやにのつて、かいこをもらいに出でかけました。蚕糸試験所さんししけんじよの門もんのところには、金ボタンきんのついた洋服ようふくをきたおじいさんがこしかけていました。お姉さんねえは、おじ

いさんの前^{まえ}にいつて、ていねいに頭^{あたま}をさげました。

「この子^こが学^が校^{っこう}からおかいこをもらつてきてかつていましたが、みんな死^しにまして、いま一匹^{びき}だけのこつています。一匹^{びき}ではお友^{とも}だちがなくてかわいそうですといしますので、もし、どんなのでも一匹^{びき}ただけでしたらと思^{おも}つて、おねがいにあがりました。」といつて、おたのみいたしました。

金^{きん}ボタンの洋^{よう}服^{ふく}をきて、ぼうしをかぶつたおじいさんは、

「なるほどな、むりのない話^{はなし}だ。一匹^{びき}きりではさびしかろう。ここにすこしのあいだ待^まつていらつしやい。」と、いつて、お役^{やく}所^{しょ}の中^{なか}にはいつていきました。

やがて、おじいさんは、新聞^{しんぶん}紙^しにゆるく大^{おお}きく包^{つつ}んだものをだいじそうにもつてきました。

そして、にこにこわらいながら、

「これだけいれば、さびしくはなかりうな。」といつて、正^{しょう}ちゃんにわたしました。

正^{しょう}ちゃんはよろこんで、お姉^{ねえ}さんといつしよにあつく、おじいさんにお礼^{れい}をいつて門^{もん}から出^でました。

「お姉^{ねえ}ちゃん、見^みようよ。」と、正^{しょう}ちゃんは立^たちどまりました。

新聞紙しんぶんしの口くちをあけると、びつくりするようなぴちぴちとしたのが五匹ひきもはいつていました。

「ぼく、こわいよ。お姉ちゃんねえ、持つていつておくれよ。」と正ちゃんしょうは、手てをひっこめました。

「まあ、正ちゃんしょう、このあいだは、かわいらしいといったじゃないの。」と、お姉さんねえはわらいました。

「だって、あんまり大きくて、元氣げんきがよすぎるんだもの。」

「こういうのでなくちゃ、いいまゆをこしらえないのよ。」

「じゃ、ぼく、こわくない！」

「ええ、だいじにしかつてやりましょうよ。そして、いいまゆをこしらえたら、学校がっこうへ持つていつて、先生せんせいやみなさんにお見せみなさいね。」と、お姉さんねえはおつしやいました。

「そうしたら、ぼく、みんなにうんといばつてやるよ。」と、正ちゃんしょうは勇いさんで歩あるきだしました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷

1983（昭和58）年1月19日第6刷

※表題は底本では、「正《しょう》ちゃんとおかいこ」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2015年5月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

正ちゃんとおかいこ

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>